

令和五年度 書道講演会

隷書を学ぶ

― 篆書・隷書・草書・行書

楷書五書体の変遷 ―

連盟副会長 小島 瑞 月

▼日時 令和六年二月二十五日(日)

▼会場 一宮スポーツ文化センター

▼講師 横井宏軒先生



本年度は講師に公益社団法人中部日本書道会副理事長の横井宏軒先生をお迎えして「隷書を学ぶ」―篆書・隷書・草書・行書・楷書の五書体の変遷―と題して講演会が開催されました。先生は20ページ

にも及ぶ資料を大変お忙しい中、私達聴講生の為にご準備してくださいました。

漢字は書体により篆書・隷書・草書・行書・楷書に大別される。

篆書とは殷から秦代の書体を呼び、起筆は蔵鋒で中鋒にて運筆。点画は同一太さで左右相称形の字形が多く、縦長である。

隷書は、篆書の点画が直線化、簡略化されて生まれ、横画の終筆に三角の装飾的な「破磔」がつき、起筆は逆の方向から入筆し中鋒にて運筆。転折は横画の終筆を一度離して入れ直す。

草書は隷書の早書きからさらに簡略化で生まれ、変化に富んだ字形と流動的な運筆で躍動感がある。

行書は隷書と草書の中間にあたる書体で、点画が曲線的で筆順が変わったり省略されたりする。

楷書は五世紀の初めには完成され、点画が明確であり、起筆は露鋒・蔵鋒にて側筆が多く、横画は右上がりである。

今、私達は古人達により生まれた五書体をいろ

いる学ばせていただき、幸せを感じずにはいられません。

隷書については破磔の有無により「前漢」「後漢」と区別され、後漢の時代に美しい破磔と様式美が確立された。隷書入門として、「曹全碑」「乙瑛碑」「礼器碑」が良いのでは、特に曹全碑は用筆・結体の特徴が良く分かり碑文字数が多い為と話されました。

続いて席上揮毫が行われ先生の気迫の込められた筆遣いと息遣いに私達は惹きつけられ、目を凝らして見入り、書き終わる度に感嘆の声とともに大きな拍手が湧き起りました。

最後に先生直筆の色紙10枚がプレゼントされ、運良く当たった方は大喜びでした。

今回の講演は勉強になることが多く、大変有意義な時間を過ごさせていただきました。

聴講者90名（内一般聴講者9名）

